

「アイム・オーケー、ユーアー・オーケー」の学級づくりを目指して ～お互いを認め合う場の設定を通して～

茨城県土浦市立下高津小学校

は せ が わ や す お
長谷川安男

【実践の内容】

「自分のことが好きだと思える子」を育てることが、生きる力の根源であると考えます。しかし、現実には、いじめ自殺・不登校児の増加・少年による凶悪犯罪などが大きな問題となっており、子ども一人一人の生きる力を育む教育とは程遠い感がある。

そこで、「ほくも君もできる。ほくも君もいい。ほくも君も大切。」という自他の存在を大切にし合える「アイム・オーケー・ユーアー・オーケー」の学級を目指し、実践を試みた。

【論文内容の紹介】

1 「ほくもできる、君もできる」の実践

図工の「ツルレイシの絵の鑑賞」の授業では、友達の作品のよいところを真剣に見つけコメントを書き込む姿が見られた。そして、出来上がった「みんなちがってみんないいで賞」を見ながら、どの子もとてもうれしそうな表情をしていたのが印象的であった。この実践を通して、「自分もできるんだ」「君もできるんだ」という自信を持たせることができた。

2 「ほくもいい、君もいい」の実践

「よさ発見メガネの授業」では、ペアを作り、お互いのよいところを手紙に書いて伝え合う活動を取り入れた。この活動をペアを変えながら数回行い、最後にもらった手紙を台紙に貼った。自分のよさを友達・教師から伝え合うことで自己理解や他者理解を深めることができた。

3 「ほくも大切、君も大切」の実践

学年末の授業参観で、10歳の節目として、

二分の一成人式を実施した。授業までの準備として、「あこのころのわたし」「4年生でのわたし」「これからのわたし」「今まで支えてくれた人へ」の4つを全員に書かせ、その中から一つ選び発表してもらった。場の構成としては、子どもたちの思い出の写真をその子の発表に合わせて、スクリーンに映し出したことで、子どもたちのなつかしい写真に思わず微笑んでしまう温かな雰囲気の中で授業を進めることができた。授業の後半では、「今まで支えてくれた人へ」の全員の発表・自作の「ありがとうが言いたくて」の全員合唱があり、精一杯気持ちを伝える子どもたちの姿に涙ぐむ保護者が多く見られた。この実践により、今までたくさんの人々に支えられて生きてきたからこそ、自分は大切な存在であることを十分感じ取らせることができた。子どもたち・教師・保護者全員が感動を共有できた授業となった。

4 「普段の学級経営の中で」

お互いのよさを見つけるために、ハッピータイムや大福帳・学級通信の発行により、教師と子どもと保護者の相互理解を目指した。また、クラスの共通の目標に向かってがんばった8の字長縄跳びの実践では、達成感やクラスへの所属感を高めることができた。

5 研究の成果と今後の課題

一人一人に成功体験を味わわせることにより、一人一人に自信を持たせることができた。また、よさを発揮する場やお互いを認め合う場の設定により、自己理解や他者理解が深まり、お互いを認め合うことにより、「ほくも君も大切な存在なんだ」という心と態度が育ってきたことがあげられる。今後も、「自分は大切な存在」だから、「みんなも大切な存在」「クラスも大切な場」であることを実感できる学級づくりを目指し、そのためには何をしなければならないかを常に考え、様々な価値ある実践を積み重ねていきたい。